



## 26年振りのキナバル山

奥富 清 (理事長)

今年(1995年)の10月中旬、東マレーシア・サバ州にあるキナバル山(4101m)に登った。といっても頂上までは登らず(登れず?)、標高約3500m地点迄であったが・・・私にとってキナバル山は、かつて1969年の3月に一度登頂しているの、26年振りの再訪ということになる。

キナバル山は69年当時はマレーシアの「キナバル国立公園」であったが、現在はサバ州立の「キナバル公園」となっているようである。しかし、広大な手つかずの自然を擁した自然公園ということにおいては昔も今も変わらない。ただ、公園の整備や利用に関しては大きく様変わりしている。69年当時は、まだ主に研究者とか山岳部、ワングル部などが登っている程度で、私が今回と同じく登山基地である公園本部から1泊2日の日程で登頂した時も、殆どの登山者が泊まる3300m地点のパナル・ラバン小屋でも、翌朝登った山頂でも登山者は私とガイドの二人だけ。人に会ったのは下山途中で出会った日本の大学ワングル部の1パーティーだけだった。それが今は比較にならないほど多くの登山者で、ちょうど週末であったことにもよるようだが、120人ほど泊まれるパナル・ラバンの宿舎群も満杯、登りも下りも頻繁に大小のパーティーに出会った。一方、これらの登山者を受け入れるための公園の整備も行き届いている。いやむしろ、行き届き過ぎているのではないかとさえ、私には思えた。69年当時には、小さな公園本部のすぐそばに、これまた小さな登山者用簡易宿舎が二、三あっただけだった公園入口付近には、今はリゾート地を思わせるような立派な宿舎が多く配置され、その変貌にはびっくりしたほどだ。また、公園本部から山頂まで全行程を歩かなければならなかったのに、今は本部から約4kmの山頂登山口まではミニバスを利用できる。登山道にしても、今は至るところにアイアンウッドを使った丈夫な階段が造られ、手摺りも付けられている。私を最も驚かせたのは、3300m付近のパナル・ラバンの宿舎群だ。ここにはたしか、10人程度泊まれる無人小屋が2棟あっただけなのに、今は全部で120～130人泊まれる宿舎群があり、とくにその中央には、50人も泊まれる大きな2階建てのラバン・ラタ・レストハウスもある。そしてさらに、登山口近くから登山道沿いに地上に敷かれた被覆電線を通して電気まできており、もちろん食事もできるし、頼めば弁当も作ってくれる。全く至れりつくせりだ。

このように、キナバル公園の登山道や宿泊施設は26年前とは比較にならないほど整備され、そのためか近年、登山者は激増しているとのことである(ただし、パナル・ラバンの宿舎群の収容力によって1日の登山者数は制限されているようだが)。しかしいずこもおなじで、施設整備や登山者増加のしわ寄せがあちこちにてできているようだ。登山道沿いではまだあまり目につかないが、パナル・ラバンの宿舎群の近くに小規模ではあるが帰化植物などからなる群落が形成されている(北山さん談)のもその一例だ。また、植被がほとんどない山頂付近の岩盤上ではゴミが目立ち、一方、宿舎から少し離れた所ではパイプからの尿尿の垂れ流して臭気がひどい(大沢さん談)のもそうだ。

キナバル山が富士山のような汚れた山にならず、いつまでも美しく、原生な自然を保ち続けて欲しいと願うには私だけではあるまい。

(後記 キナバルでは、環境庁・森林総研のプロジェクトでキナバルの植生を調査中の千葉大の大沢雅彦さん、森林総研の北山兼弘さんに大変お世話になった。深謝する。)

## 平成7年度助成事業の報告

平成7年度本基金の助成は総額 3,500万円

(財) 日本自然保護協会との共同事業による公募助成	22件	2,200万円
(財) 世界自然保護基金日本委員会の事業助成	1件	400万円
(財) 日本自然保護協会の事業助成	1件	300万円
その他の助成	3件	600万円

が決定、11月以降平成8年にかけて助成を行う。(内容は以下に紹介)

## 平成7年度本基金の助成内容

### ○(財)世界自然保護基金日本委員会の独自事業助成

- ・白保サンゴ礁保護研究センター(仮称)にかかわる諸活動

助成額：400万円

1998年開設予定のセンターのマスタープラン作成、その間の準備室の運営費用および赤土流失問題の調査について助成する。

### ○(財)日本自然保護協会の独自事業助成

- ・沖縄やんばる地域の生物多様性保全事業

助成額：300万円

やんばるの森には多くの稀少生物が生息するにもかかわらず、保護区の設定もなく開発が進められていることに危機感を抱き、この地域の自然、社会環境調査を進め、生物多様性保全に必要な施策の提言を行うもの。

### ○極東ロシア森林のホット・スポット・プロジェクト 地球の友日本 代表：亀井ナオミ

助成額：400万円

シベリアの森林減少は、いまや熱帯林について危機的な状況にあり、地球温暖化に深刻なインパクトとなろうとしているが、いままで情報・データが不足していたために問題が顕在化していなかった。地球の友日本は昨年極東ロシアの研究者、保護活動家を動員して調査を行い、の結果を持寄って、今年50箇所ホット・スポット(危機にある地点)を選定した。その中から日本にも近い4箇所に関する調査プロジェクトを助成する。その結果をふまえて具体的保護策が現地行政当局へ提出される。

### ○北海道湿原の変遷と現状の解析(継続案件)

北海道湿原研究グループ

助成額：100万円

代表：辻井達一(北星学園大学教授)

2年間にわたって実施した調査結果をまとめ、最終報告書を作成し、北海道の湿原の保全に関する提言を行う。

### ○長良川河口堰モニタリング調査(継続分-5年間の第3年度)

長良川河口堰モニタリング調査グループ

助成額：100万円

代表：田中豊穂(中京大学教授)

前々年、前年に引続き諸調査を実施し、指標の変化を監視する。

○プロ・ナトゥーラ・ファンド第6期助成先一覧

(本基金と(財)日本自然保護協会との共同事業による助成。助成金総額 22,000千円)

NO.	タイトル	グループ名	代表者	助成:千円
・国内研究助成				
1	チョウセンイタチ侵出地域におけるニホンイタチの生息分布とその保全に関する研究	紀伊半島野生動物研究会	青井 俊樹 (北海道大学)	1,200
2	日本の湖沼に於ける車軸藻類の分布の現状調査と絶滅危惧種の系統保存株	日本産車軸藻類調査研究グループ	野崎 久義 (東京大学)	1,000
3	野生生物の保護に係わる国際条約の具体化に関する研究(継続)	野生生物の保護に係わる法体制検討会	磯崎 博司 (岩手大学)	1,100
4	コシガヤホシクサの保護増殖に関する研究(継続)	コシガヤホシクサ研究グループ	宮本 太 (東京農業大学)	500
5	知床国立公園におけるヒグマの生息地保護管理のための研究	知床ヒグマ研究グループ	村上 隆広 (北海道大学大学院)	1,000
6	キリクチ(イワナ)の生息環境・保護に関する研究	淡水生物研究会	名越 誠 (奈良女子大学)	700
7	北太平洋における海洋哺乳類(鯨類およびラッコ)の死亡要因の解明	日本哺乳類学会海獣談話会	大森司 紀之 (北海道大学)	1,500
8	金華山のシカが草地植生の種多様性と生産構造に与える影響	東北大学植物生態学研究グループ	広瀬 忠樹 (東北大学)	800
9	山形県朝日町ヌルマタ沢流域における自主環境影響調査	ヌルマタ沢流域の自然を考える会	倉持 武彦 (株式会社 エッジ)	800

国内活動助成

10	希少ウミスズメ類の現状と保護(継続)	日本ウミスズメ類研究会	青山 莞爾	1,340
11	屋久島自然保護のための自然保護教育プロジェクト	屋久島研究自然教育グループ	鈴木 滋	760
12	新治村の猛禽類報告書の作成及び同地域の保護・利用の具体案の提言	新治村の自然を守る会	岡村 興太郎	850
13	国際シンポジウム「ワイルドアニマルレスキュー4」記録集編纂	野生動物救護獣医師協会	野口 泰道	950
14	「市民による里山の保全」のためのリーダー養成と活動マニュアルの作成	(社)大阪自然環境保全協会「里山委員会」	木下 陸男	900
15	北海道自然保護読本(暑寒別・天売焼尻の自然)の発行	(社)北海道自然保護協会	俵 浩三	660
16	大雪山国立公園における自然保護を目的とした環境プログラムの作成	北大自然保護研究会	渡辺 修	500
17	藤前干潟の保護と干潟における環境教育の実践	藤前干潟を守る会	辻 淳夫	760
18	シベリア森林破壊問題についての基本書の作成	日本環境保護国際交流会シベリアプロジェクト	後藤 大介	900

・海外研究助成

No.	タイトル	代表者	所属機関	助成額:円
19	タイ国におけるサイショウ危急種2種の生態研究	Pilai Poonswad (タイ)	マヒドン大学理学部	1,700
20	行き詰まっているジャイアントパンダの基本的生態系維持の回復	潘 文石 (中国)	北京大学生命科学院ジャイアントパンダ保護研究センター	1,500
21	カンチェンジュンガヒマールの国立公園化を促進するための環境保全調査	Madhab Prasad Gautam (ネパール王国)	トリビューバン大学	1,500
22	内蒙古自治区・賀蘭 (Helan) 山地域における希少有蹄類 (アガメ、ヤマメ、カウ、フーシーフ) の生態学的特性と保全	盛 和林 (中国)	華東師範大学 生物系	1,080

\* \* \* \* \*

平成6年度決算ならびに平成7年度予算

当基金では平成7年5月15日に第5回評議員会・理事会を開催し、平成6年度の事業報告、決算報告及び平成7年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は次表の通りです。

平成6年度決算ならびに平成7年度予算 (単位:千円)

項目	平成6年度		平成7年度
	予算	決算	予算
(収入の部)			
基本財産運用収入	40,000	50,889	65,000
運用財産収入等	5,000	162	0
雑収入	300	547	100
前期繰越金	11,276	11,276	8,214
収入合計	56,576	62,874	73,314
(支出の部)			
事業費	34,000	34,300	45,000
活動助成	(10,000)	(5,400)	(14,000)
調査研究助成	(24,000)	(28,900)	(31,000)
管理費	19,000	19,960	19,600
特定預金支出等	900	400	900
次期繰越金	2,676	8,214	7,814
支出合計	56,576	62,874	73,314

「湿地および開発に関する国際会議」(本年10月8日～14日、マレーシア・セランゴールで開催)において、4グループに分かれた Mid-conference Excursion(視察旅行)が企画され、筆者はその第一グループに参加することとし、会場のハイアットリージェンシーホテルに待機のKuala Selangor Nature Park 行きバスに乗車した。バスは予定より1時間おくれ午後2時に出発、約2時間、高速道路を走行して、自然公園(KSNP)ゲート前に到着。

この自然公園はセランゴール市街の南西セランゴール川河口にある約320ha.のマングローブ湿地帯に人工の手を加えて、海岸道路や遊水湖、淡水路などを設置し、シギ・千鳥類の誘致を図るなど、動植物保護を主要目的として、1987年9月27日、セランゴール州知事が国立公園として創立した。その管理、運営を民間(NGO) Malaysian Nature Society (MNS) に委託している。

公園入口から徒歩直進約5分でヴィジターセンターに着き、説明を聞いた後、マングローブ林を貫く小径を歩くこと約10分で、湖畔に達した。岸に沿っていばらなどをかき分けてやっと通れる小径があり、ところどころにバードウォッチング小屋や観察塔が設置されていた。ホンコンのマイア鳥類保護区に似てシギ・チドリやカモ類がその他の野鳥が多数集合しそうな自然環境であるが、当日はタイミングが悪かったためか、観察できた鳥はアオアシシギ約30羽、ダイサギ、コサギ、コウハシショウビン各1羽と、上空を帆翔する数羽のカムリワシに過ぎなかった。しかし、観察小屋背後のマングローブ林の樹間を移動しながら枝を揺すって威嚇姿勢を示す大型のサル Silvered Leaf-Monkey 約7～8頭を観察出来たのは、上述のコウハシショウビン(嘴が大きく美しい大型カワセミ)と共に永く心に残る大収穫であった。

夕陽が迫るころ、視察団は公園ゲートから約9km 離れたKampung Kuantan という静かな村に移った。Fire-flyと言うホタルの一種を見学するためである。乗客は4名しか乗れない手漕ぎの小舟で4～50m. 幅の暗い水路を静かに進んで行くと、兩岸にこんもりと茂ったマングローブの樹木という樹木の葉っぱに無数のFire-flyが止まり、光を放っていた。それはマングローブ林全体にきらめく星屑をまぶした感じの異様な美しさであり、しかも光の点滅はシンクロナイズしていた。その数何万、何十万匹かのFire-flyがあたかも心をあわせて同時プレーしているのではないかと、訪れるものは幻想の世界に引き込まれてしまう。岸辺に小舟を寄せて、葉っぱにとまったホタルの一匹を捕まえてもらって、手にとって懐中電灯で照らして見ると、体形は以外なほど貧弱な体長6～7mmの茶色の小虫で、また、はねは(わたしの目の誤りか)案内の看板やパンフレットのホタルとは思えないくらい、薄くハエ的に見えた。しかし闇夜のなかで発する光の強さは、源氏ボタルに勝るとも劣らず、発光はあたかも満身からではないか、と思うくらい明るかった。

この国は自然志向観光客誘致の、KSNPのような自然公園を地域振興の一つの柱としているが、政府や州の自然保護に関する配慮はかなりのものと思われ、どこかの国のように見せ物の自然を破壊する愚かな開発は当分ない、と感じた。こう感じた一つの理由は、今回の国際会議におけるマハチール首相のスピーチで、お役所の紋きり型自然保護作文を遙かに越えた印象を受けたからである。もう一つは、タクシーの運転手からの印象である。筆者はホテル直属あるいは流しのタクシーを数回利用したが、どの運転手もお喋りで、しかも政治に対するはっきりした意見を開陳してくれた。たとえば「マハチール首相の手腕は抜群に優れ、これに比べると、日本の首相は少し劣り、英国の首相は最低だ」。また「マ首相の働きで、この国にもはや失業者は皆無であり、経済は日本の援助で急上昇機運にあり、その象徴はクアラルンプール市に林立する高層ビルだ。ただし高層のマンションに住むのは月収1万マレーシア・ドル以上のエリートたち。自分は、自然がない都市を働く場所とするが、住みたいとは思わない」という具合である。自然保護政策について聞くと「旧マンガン鉱区あとに植樹するなど、自然と人の共存を考えてくれていると思う」とのことだ。ちなみに、帰国後テレビ、新聞などに見るAPEC会議では、マハチール首相の存在がとりわけ際立っていたが、さもありません、と筆者は独り納得した。



観察塔



## 自然との会話



ヤマボウシ

自然を愛する方は、まさかもの言わぬ花とか樹木などという考え方をなさる方はおられないと思います。そうです、花も樹もこちらから話しかければちゃんと答えが返ってきますし、自然の中を歩いていると彼らの話声が聞こえます。「ねえ、見て見て、あたしきれいでしょ」「今年も元気にまた芽をだすことができたゾ」と精一杯に太陽に向かってのびをしているような平和な声ならば良いのですが、「あたしを伐らないで、お願い！痛いよ」とか「なんでこんなに息苦しいの？」といている声を聞くたびに何とかしてあげたいと思うのは同じ自然界に生きるものとしては当然のことではないでしょうか。山を歩いていて一生懸命に生きようとしている彼らを見る度に神の造り賜うたこの素晴らしい自然を人間の勝手に壊しては絶対にいけないと思うのです。ただそれだけの単純な理由でこれからも頑張っていくつもりです。

岡本 和子（理事）

### 「第1回PNファンド助成成果発表会」開催

当基金と（財）日本自然保護協会は、今年から共同事業であるPNファンドの助成による成果を、発表会の形で、前年度助成先に報告願うこととなり、去る12月9日午後1時より、東京渋谷の「こどもの城」研修室において「第1回PNファンド助成成果発表会」を開催した。発表者は、昨年度国内研究助成の9団体と、国内活動助成5団体で、そのうち研究助成の「御蔵島自然研究グループ」は伊豆御蔵島の2年にわたる調査で幾種もの希少植物を確認したことを報告、また活動助成の「岩木山を考える会」からは、活動の結果、弘前リゾート計画にあった弥生スキー場開発を青森県が断念するに至った経過が報告され、注目を集めた。引き続いて行われた懇親会では、発表者同士や聴衆との間で質問、意見交換、情報交換が活発に行われ有意義な集いとなった。

\* \* \* \* \* お知らせ \* \* \* \* \*

#### お詫びと訂正

ニュース第3号4ページ、「PNファンドの助成による本年度刊行物一覧」のうち日本自然保護協会ビデオテープ「森の国イヌワシ」は当基金助成分ではありませんでしたので、お詫びして削除致します。

地球の友日本が1月に刊行する「シベリア/ロシア極東森林ホットスポット」の英文報告書 [RUSSIAN FAR EAST:BIODIVERSITY HOT SPOTS AND INDUSTRIAL DEVELOPMENT] (200ページ)を当基金でも若干部入手の予定しております。ご関心ある向きにお届け致しますのでご照会下さい。

#### 編集後記

第4号をお届け致します。今年は阪神大震災に始まりオウム、山口代議士、住専と本当にいろいろな問題があった年でした。これらの事件の陰に隠れながら、自然、環境破壊の現実もどんと悪い方向に進んでいるようです。金利の低下に頭を悩ませながら、来年は少しはよいことがあるように願わずにはいられません。（自然保護教団を作って全世界の人々をマインド・コントロールしたい）今冬はこのほかお寒くなるようです。体に気をつけて来年も頑張りましょう。 岡本和子記

Pro Natura ニュース第4号

発行者：財団法人 自然保護助成基金  
発行年月日：平成7年12月21日

〒150 東京都渋谷区松涛1-25-8  
松涛アネックス2階

TEL:03-5454-1789 Fax:03-5454-2838